

「医者になりたい女性のために」 女性医師の先駆者

佐藤 やい



病気で苦しむ人を助けたい

「先生、リユーマチの原因は、何なのでしょう」「新湊の石黒医院で、看護婦や子守として働いていた佐藤やいさんは、院長に質問しました。やいさんは、分からないことは放っておけない性格で、いつも納得のいくまで、熱心に話を聞きました。

その当時、新湊では、関節が変形するリユーマチや肺炎、脚気などに苦しむ人たちが非常に多くいました。というのも、新湊の水田は深い湿田が多く、腰まで水につかって農作業をしたり、長時間、無理をして働いたりしていたからです。

病気で苦しむ人たちを、何とか治してあげられたいのに。

向学心に燃え、熱心に働くやいさんは、石黒伯医院長から医学に関する基礎的なことを、少しずつ教わるようになりました。



吉岡弥生先生のおかげで

私は、医学の道に進むことができた。これからは、研究者としてはもちろん医学の道を歩もうとする後輩のためにもできる限りの努力をしていこう。

やいさんは、富山県の女性で初めての医学博士だよ。

病理学の研究と、女性のお医者さんの教育に一生を捧げたのですね。



「私もお医者になりたい」
そうしているうちに、やいさんの胸に、一つの夢が芽生えてきたのです。

佐藤やいさんのミニ年表

西暦	年齢	
1898年		射水郡新湊町(現在の ^ニ 新湊市放生津町)の安川家に生まれる
1913年	14歳	新湊町立新湊尋常高等小学校高等科卒業、石黒医院に勤務
1915年	17歳	一人で上京して、吉岡家の書生になる
1919年	20歳	東京女子医学専門学校入学、校務を手伝いながら通学する
1923年	25歳	東京女子医学専門学校卒業、同校病理学教室の専門助手となる
1932年	33歳	ドイツに留学する
1937年	38歳	東京帝国大学医学部に学位論文提出。医学博士となる
1938年	40歳	実業家佐藤清一さんと結婚する
1956年	58歳	病理学教室をやめ、後輩の指導にあたる
1964年	65歳	亡くなる

やいさんは、子どものころ、学校や勉強が好きで、一日も学校を休まなかったんだって。



医者になるための道

ちようどそのころ、夢を抱いたやいさんを応援するよゆうな出来事が起こりました。

近所に住む先輩で、やいさんと親しかった杉谷友子さんが、東京女子医学専門学校(現在の東京女子医科大学)に入学したのです。

「友子さん、東京でどんな勉強しているの?」

「お医者様になる勉強よ!」

「まあ、女のお医者様! すごいねえ! うちやましいわ。私も進学して、もっと勉強したかったなあ」

「女は行儀作法を身につけて、いいお嫁さんになることが幸せだという考え方は、きつと変わってくると思うわ。これからの時代、女だって学問や技術を身につけることは必要よ!」

「ねえ、友子さん、なんとか、私も医者になれないかしら...」

「絶対、何か方法があるはずよ。私、東京に戻ったら、校長先生に相談してみるわ。校長先生は吉岡弥生とおっしゃって、女でも安心して医学の勉強ができる学校が必要だと考えて、今の学校を作られたのよ!」



やいさんの遺言と寄付により建てられた「佐藤記念館」。

「ああ、吉岡先生の学校で勉強できたら、どんなにすばらしいかしら!」
こうして、やいさんの夢は、どんどん大きくなっていきました。

吉岡先生との出会い

「私、どうしても東京に行きたい。医学の勉強をしたい。病気で苦しむ人に、少しでも役に立てるようになりたいの!」

17歳のやいさんは、周囲の反対を押し切り、風呂敷に身の回りの物を包んで、夜行の汽車にゆられ、東京へ出て行きました。

「吉岡先生、どんなことでもしますから、先生のお宅に置いてください!」

「働きながら勉強するのは、大変ですよ。でも、どうしても!」と思うのなら、がんばってみなさい!」

こうして、やいさんは、吉岡先生の家に書生として住み込むことになりました。吉岡家の家事や子守を手伝いながら、昼は学校の事務職員として働き、



研究をするやいさん。
(新湊市立新湊小学校6年 朴木詩織さん)

子どもたちの感想

新湊市立新湊小学校6年生のお友達の感想です

一日も学校を休まなかつたなんてすごい。ぼくは学期に二、三日は休んでしまうのに。それだけ勉強がしたいという気持ちが強かつたんだなあ。でも佐藤先生は働き過ぎです。ちゃんと自分の体もいたわっていたら、もう少し長く生きていたかもしれない。
(清水彬永さん)

佐藤先生が周りの人に愛され、尊敬されていたということは、周りの人をとっても大切にしていたんだと思います。わたしも友達や家族を大切に、助け合っていきたいです。一番見習いたいところは、「医者になる」という大きな夢をもち、一生懸命努力し、その夢をかなえたところだと思います。
(川口舞さん)

努力をしたら、必ず報われるものなんだなあ。新湊市に日本を代表するようなこんなすごい人がいるというのは新湊の自慢だ。
(牧野起雄さん)

佐藤先生が医者になれたのは、人を助けたいという気持ちが強かつたからだと思います。また努力家がまん強い。私もそんな人になれたらと思います。私の夢は人のためにつくせる人になることです。私は佐藤先生の話聞いて、自分の夢を早くかなえたくまりました。それにはたいへんなことがたくさんあると思うけど、佐藤先生のようにりっぱにのりこえたいです。佐藤先生を目標にしてつらいことがあったら、佐藤先生のことを思い出そうと思います。
(野村史織さん)

夜は試験勉強をするという、とても忙しい生活を始めたのです。

そんなやいさんの姿を、吉岡先生はじつと見守っていました。

そのうち、やいさんの仕事ぶりや能力、勉強したいという情熱、誰にでも優しく明るい性格などに心を打たれ、やいさんをずっと応援し続けてくれるようになったのです。

そしてついに、やいさんは試験に合格。憧れの吉岡先生の学校で、医者になるための本格的な勉強ができるようになったのです。上京してからわずか3年半のことでした。

難しい学問への挑戦

卒業が近づいたある日、やいさんは卒業後の進路について聞かれました。

「卒業後は、どうするつもりですか」

「医者になれたのは、吉岡先生のおかげです。母校の発展のためにも、できる限り、先生のお手伝いをしたいと思うのですが…」

「ふるさとで開業して、患者さんを診ることも大切な仕事です。しかし、学校に残って、医学の研究を続けることも、人のいのちを救うことにつながるでしょう」



吉岡弥生・荒太夫妻の胸像除幕式で。やいさんは右から2番目。



帰省した先輩に、学校の話聞くやいさん。
(新湊市立新湊小学校6年 牧田恵奈さん)

やいさんは病理学教室の助手になることを勧められました。

病理学とは、亡くなった人の体を解剖して死因などを明らかにするという学問で、医学の基礎として大事な分野でした。

しかし、とても難しい分野なので、この研究を進んでやろうとする人は少なかったのです。

研究を続けることを決心したやいさんは、吉岡先生の期待に十分に応えるために、毎日病理学の研究に明け暮れ、また後輩の指導にも力を注ぎました。

ドイツへ2年間留学した後も、やいさんは研究を続けました。そしてついに、論文が認められて医学博士号を取り、女性としては日本初の病理学の教授となったのです。

研究以外でも、やいさんは吉岡先生を支え、母校



やいさんと東京女子医大：大学の講堂で行われたやいさんのお葬式には、1500人以上の人が最期のお別れをするために集まり、誰からともなく校歌が歌われ、大合唱になったそうです。



今、日本人の平均寿命はおよそ男78歳、女85歳です。でも、その日さえ楽しければいいとただらと過ごしていると、あっという間に年をとってしまいますよ。佐藤やいさんのように自分のために、人のために世の中のために何か喜ばれることをやろうという「ころざし」をもって生きてほしいと思います。
(佐藤やいさんについて、松下ナミ子先生からお話を聞く新湊市立新湊小学校6年生のお友達)

のために尽くしました。戦争のために校舎や病院が壊れたり、学校の資金が不足したりしたときも、やいさんは、学校を守るために、あちこち忙しくかけまわったのでした。

母校と後輩のために

充実した日々を送っていたやいさんに、突然、悲劇がおそいかかりました。緑内障という目の病気をわずらい、次第に視力が衰えてきたのです。

レンズをふいてもふいても、プレパレートがくもって見える。もう、私は顕微鏡をのぞいて研究することができなくなってしまった。

病理学研究にたずさわって30年。顕微鏡を片時も離さずに研究を続けてきたやいさんの悲しみとショックは、どんなに大きかったことでしょう。

こうなったら、私にできる別の方法で、医学と母校の役に立つように努力するしかない。

やいさんは、病理学研究の第一線をしりぞぎ、学生や教授、病院の医師たちの相談相手という、今までとはちがう仕事をするようになりました。

やいさんは、新しい仕事にも、それまでと変わらない情熱で取り組みました。そして、その持ち前の包容力と優しさで、たくさんの人たちに慕われ、頼りにされたのです。やいさんは「やい先生」の愛称で親しまれ、学校における母親のような存在になっていきました。

医者になりたい一心で家を出てから50年。やいさんは、一生を通じて、研究と母校の発展のために尽くしたのでした。

難しい学問にチャレンジしたところが、すごいなあ。

家の事情で、一度は進学をあきらめて働いたのに、やいさんは夢を追い続けて実現したんですね。

やいさんは、辛ほう強くてしっかりした人だったそうです。



やいさんは、後輩の教授や学生の悩みに、親身に応えていました。次のページで紹介する横山源之助さんも、貧しくて困っている人々の味方になり、さまざまな活動をしました。



研究室でのやいさん。